

アーミッシュ・ビジネスの展開

——ペンシルベニア州ランカスター郡の場合——

小坂 幸三

はじめに

アーミッシュの天賦の職業は農業であるというイメージは一般に広くゆきわたっている。近代的農機具を使わずに、額に汗して家族共同で農作物の刈り入れをするアーミッシュの姿を映した写真集などが、農業を中心とする平和で牧歌的なアーミッシュ的生活様式のイメージを強調する。実際、アーミッシュは伝統的に農業を生活の糧とし、宗教—農業自治共同体とも言えるコミュニティを彼らの定住地域に形成してきた。アーミッシュが優れた農業従事者であることは事実であり、アーミッシュ共同体の中で家族や隣人が互いに助け合い、大地を耕し、その恵みの収穫を得る農業をアーミッシュは神聖かつ最適な職業とみなしてきた¹⁾。しかしながら近年、アーミッシュの職業は農業であるというイメージは現実のアーミッシュの職業形態と離反しつつある。特にこの傾向が顕著であるのがペンシルベニア州ランカスター郡である。

ランカスター郡はオハイオ州ホームス郡、インディアナ州エルクハート郡とともに全米における旧派アーミッシュ²⁾の3大定住地域のひとつであり、最も古くからアーミッシュ共同体が発展した地域である。肥沃な石灰質の土壤に恵まれているため、アーミッシュを中心とする勤勉な農家が高い農業生産性を保ち、全米有数の農業生産地となっている。さらに、旧派アーミッシュの定住地域として全米で最もよく知られており、アーミッシュを見ようとする観光客が年間約5百万人も訪れる全米有数の観光地ともなっている。この地域はフィラデルフィア市から約65マイル、ワシントン D.C. から約135マイル、ニューヨーク市から約165マイルの便利な位置にあり、東部メガロポリスの一端を担っている。ペンシルベニアダッチに代表される勤勉で安定した労働力の供給、大都市圏への容易なアクセス、観光産業の飛躍的發展などに支えられ、ランカスター郡の経済は1970年代から活況を呈し、ペンシルベニア州で最も高い経済成長率を示し、産業化と郊外化の波がランカスター郡を席卷した。このため、1970年代から80年代にかけて土地需要が高まり、ひいては土地価格が急速に上昇した。一方、ランカスター郡に定住する旧派アーミッシュは過去約20年間に人口が急激に増加していった。1970年には47教会区に約7千人のアーミッシュ人口が存在していたが、1990年には100教会区に増加し、人口も約1万7千人に増えた³⁾。アーミッシュは信仰上の理由から避妊を拒否するために、1家族につき平均約7人の子供を生み、子供たちの大半がアーミッシュ共同体から離脱

することなく、成人洗礼を経て一生涯アーミッシュとして生活することを誓う。1970年以前はランカスター郡の大多数のアーミッシュは農業に従事していたが、地価の高騰とアーミッシュ人口の急増という事態に直面して、彼らは幾つかの選択肢を試みた。第一に、ペンシルベニア州の近隣の郡への集団移住である。ランカスター郡ほど土地が豊穡ではないが、土地価格が低いので広い土地を購入でき、彼らは農業を継続できた。しかし、緊密な相互扶助の人間関係を大切にするアーミッシュにとって、住み慣れたランカスター郡のアーミッシュ共同体を後にすることは、多大な犠牲をはらうことにもなった。急激な地価高騰に耐えられず、1970年代にはペンシルベニア州の近隣の郡への集団移住が活発化した⁴⁾、1978年を最後にして、1980年代はランカスター郡からの近隣の郡への集団的移住は行なわれていない。第二に、現存するアーミッシュ農地の細分化である。アーミッシュの農業は元来労働集約型であり、百エーカー以上の農地は稀なため、1家族平均7人の子供がいることを考えれば次世代へ譲り渡すための細分化にも限界がある。第三に、職業選択の多様化である。農地を地価高騰のために購入できず、かつ移住を断念するとすれば、農業以外の職業を選択せざるをえない。事実、専門家の間では農業がアーミッシュ共同体を支えるシンボリックな職業であるため、アーミッシュの他分野への職業進出の可能性は低いと論議されていたが⁵⁾、ランカスター郡ではアーミッシュが様々な自営業を中心とする職業を開拓し、アーミッシュ共同体に留まっている。

本稿では、ランカスター郡で農業の代替的職業として始まった様々なアーミッシュ・ビジネスの実態を紹介し、それらの成功要因を分析する。そして過去約20年間に新たな職業についたアーミッシュのグループが農業を基盤として築き上げられて来たアーミッシュ共同体へどのような影響を与えているかを考察し、彼らの今後の展開を論考する。

1. アーミッシュ・ビジネス急増の実態

1970年代から80年代にかけて、ランカスター郡ではアーミッシュ経営の様々な自営業が急速に増加した。同時に農業専従者の割合は減少する一方である。1950年以前には90パーセント以上の旧派アーミッシュは農業に従事しており、大工や鍛冶屋などの自営業者はごく一部に限られていた⁶⁾。ところが、1973年発行のランカスター郡旧派アーミッシュ住所氏名録によれば、旧派アーミッシュの男性労働人口の約66パーセントが農業に従事し、その他の職業は34パーセントを占めている⁷⁾。1988年の旧派アーミッシュ住所氏名録改訂版では農業専従者が約55パーセント、その他の職業が約45パーセントとなっている⁸⁾。推定ではあるが、1990年代に入り、農業専従者の比率は全体の50パーセントあたりであろうといわれている。すなわち、旧派アーミッシュの労働人口の約5割が農業以外の職業に就いていることになる。一方、アーミッシュ人口も同時期に急増している。1973年には50教会区に旧派アーミッシュの成人男性が約1600名いたが、1988年には教会区は85に増加し、成人男性も約3800名になった⁹⁾。この時期にアーミッシュ経営の農地の大幅な拡大はなく、子供への農地の細分化による譲渡も限界があることを考慮に入れれば、成人男性人口の増加分の多くが農業以外の職業によって吸収

されたことが分かる。ランカスター郡の旧派アーミッシュ教会は一般に非アーミッシュ経営による会社への就職は極力避けるように指導している。従って、70年代から80年代にかけて多くの成人男性は自分で事業を起こしたか、またはアーミッシュ経営の会社に雇われたと見るのが自然である。

1993年、ペンシルベニア州立大学はペンシルベニア州からの要請を受けて、ランカスター郡のアーミッシュ・ビジネスの実態を明らかにするために現地のフィールド・リサーチを行なった。アーミッシュ人口の稠密な13教会区を選び、アーミッシュ・ビジネスが展開されている基準として、次の3条件を課した。(1)年間売上高が1000ドルを越えていること。(2)経営者がビジネスをする意図があること。(3)看板や名刺の存在などビジネスを展開している明らかな証拠があること。この3条件を課すことにより、農業のサイドビジネスとして行なうアーミッシュの道端での野菜売りなどが除外された。調査結果によると118の自営業が存在し、118名の自営業者のうち114名と詳しい面談が実施された。13教会区の選定に関しては、農業主体の教会区から、アーミッシュ自営業が集中する教会区まで様々な教会区を選び、ランカスター郡全体のアーミッシュの職業傾向が反映されて、平均的数値がでるように考慮された。1993年時点では、ランカスター郡全体では、約950のアーミッシュ自営業が存在すると言われている¹⁰⁾。

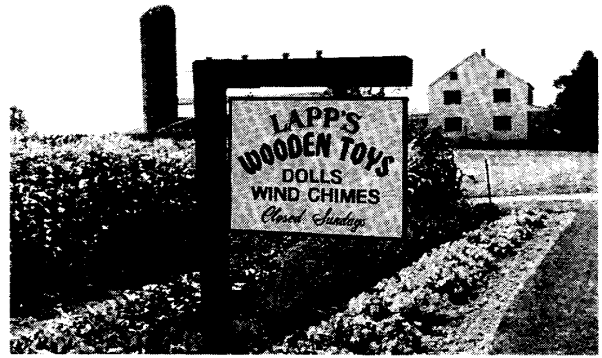
114名との面談で特徴あるアーミッシュ・ビジネスの傾向が現われている。第一に、全体の83パーセントのアーミッシュが事業を自分で起こしたと答えている。親や親類からの譲渡および買収は15パーセントであり、2パーセントが他のアーミッシュからの買収となっている。すなわち、圧倒的多数が事業の創業者といえる。第二に、事業を始めた年齢は19才から25才までが23パーセント、26才から35才までが26パーセント、36才から45才までが26パーセント、46才以上が25パーセントとなっている。35才以下での創業が約5割もある。第三に、1960年以前に創業されていたものは全体の6パーセント、1970年代の創業が34パーセント、1980年代以降の創業が60パーセントを占めている¹¹⁾。これらの数値からアーミッシュ・ビジネスは1970年代以降に花開き、創業の息吹きも聞こえそうな若々しい事業群の台頭であることがわかる。さらに、13教会区の念密な調査によって、事業の失敗、撤退がこの時期に皆無であったことが確認されている。

118の自営業の内訳では20以上の業種があるが木工関連の事業が多く、全体の約25パーセントを占めている。また金物や機械を取り扱っている自営業も多い¹²⁾。アーミッシュ社会において農業以外の伝統的職業としてアーミッシュ教会およびアーミッシュ共同体から認知を得ていたものに、大工と鍛冶屋があった。このため旧派アーミッシュは木工、金物関係に詳しく、その伝統が受け継がれている傾向があるように思われる。

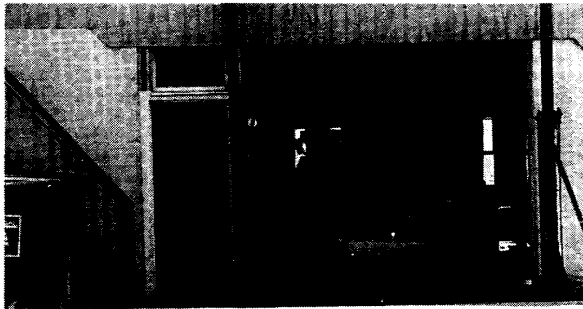
ペンシルベニア州立大学による調査結果はランカスター郡全体のアーミッシュ自営業の近年の展開をよく反映している。ランカスター郡のアーミッシュ自営業は大きな範疇では3種類に分かれる¹³⁾。第一に、家内工業的な小規模な店舗が1970年代、80年代に数多く現われた。ランカスター郡の旧派アーミッシュ定住地域を訪れると、至る所で家具店、玩具店、キルト販売



アーミッシュ経営の金物店



アーミッシュ玩具店の看板



アーミッシュの木工製品製造工場



アーミッシュ経営の農機具製造工場

店、パン屋、食料雑貨店、鍛冶屋、馬車修理屋、金物店等の看板を眼にする。これらの店舗は旧派アーミッシュによって経営されているが、その規模は小さく、従業員も1名から数名までで、一般に自宅や納屋の側に店を作り、品物を製造販売して家族や親族が協力して営業している。これらの店舗の職種は多岐にわたっているが、地元のアーミッシュ、ランカスター郡の住民、観光客などを顧客として利益を上げている。第二に、比較的大きな規模で製造業を営むアーミッシュ・ビジネスがある。しかし、製造業として従業員数は20名前後までであり、アーミッシュ事業家がアーミッシュ用の農業機具や動力工具を製造する工場、家具やシステムキッチンの木工場、非アーミッシュの製造会社の下請け工場などを経営している。彼らは出来上がった製品をアーミッシュ自営業者やアーミッシュ農民に納入したり、一般の会社に販売したりしている。これらの工場はアーミッシュの農地跡に建設される場合が多い。第三に、大工や建設業にかかわる独立自営型の木工作業グループがある。彼らには要請を受ければ、ランカスター郡のみならず、近隣の州へも足を運び、家の建設やシステムキッチンの備え付けなど、受注した仕事をする。

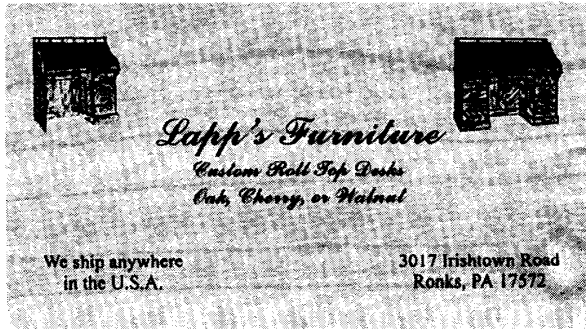
2. アーミッシュ自営業者の具体例

アーミッシュ・ビジネスがランカスター郡で隆盛を極めていることは統計的には明らかであるが、ここではアーミッシュ自営業者の具体例を少し紹介して、彼らの事業の展開を垣間見る事とする。

ヘンリー・エッシュはインターコース町にあるクイーン・ロード・インダストリアル・エンジンの社長である。彼の会社は主として酪農家にたいして牛乳冷却用の装置の販売とそのメンテナンス・サービスを行なっている。ランカスター郡のみでなく、東部地域一帯に販売網を展開し、売り上げを伸ばしている。エッシュは1945年に5人兄弟の末っ子として生まれた。彼によれば、「自分で生計を立てようとする年令に達したときには農地は残っていなかった。父親はその時65才で銀行から土地を買うために金を借りるには歳を取りすぎていた」ため、インターコース町にある農機具製造販売会社に雇われた。ここで彼は機械類の仕事に非常に興味を持ち、ディーゼルエンジン部門の職工長となった。ディーゼルエンジンと関連製品の技術をマスターしたのち、27才で独立した。ディーゼルエンジンを動力源とする牛乳冷却用の装置を開発し、アーミッシュ世帯に販売し成功を収めた。この成功を契機としてさらに事業を拡大して、ディーゼルエンジンに関連した他の製品開発も手掛けた。デール・カーネギーの販売と経営の通信教育講座も受講したエッシュは、「3種類の人間のタイプがある。事を起こすタイプ、それを見ているタイプ、何が起こったのかと思っているタイプ。私は事を起こすタイプの人間になりたいんだ」と語り、意欲満々である¹⁴⁾。

ロンクス町在住のアイザック・カオフマンは手製のアンティーク時計製造の店舗を開いている。彼の作るアンティーク時計は非常に人気があるが、客の注文を受けたのち丁寧に時間をかけて作るため、需要に追い付かない。5年間で約50個のアンティーク時計を製造している。価格はサイズや模様にもよるが2000ドル前後になることが多い。彼の父親は農民であったが、背中を痛めて農業の継続が困難になったため、時計修理の仕事を副業として始め、のちに時計修理が本業となった。息子のアイザックが農業を継続したが、父親の仕事に興味を持ち、結局息子は父の仕事を手伝いながら弟子となり、時計の修理や製造を覚えていった。さらに、アンティークの時計製造の腕を研ぎ、美しいアンティーク時計を作る評判を高めていった。「時計作りはわたしがしたい仕事なんだ。血筋かな。農業でも生計は立てられるがこの仕事ほど楽しめない」とカオフマンは語る¹⁵⁾。

ロンクス町在住の同姓同名の二人のジョン・ラップ (John D. Lapp と John K. Lapp) 氏を紹介する。彼らは遠い親戚筋にあたり、住居兼仕事場はお互い徒歩約5分ほど距離に位置している。かれらはジョン・バイラー率いる第61教会区に属している。John D. Lapp氏は1946年生まれであり、1969年に結婚し、4男2女に恵まれ父親の後を継ぎ農業を営んでいたが、1986年からラップ家具製造販売店を単独で開いた。ラップ氏の創る精巧なロールトップ・デスクは口コミで評判を呼び、2千ドル以上の高価な机であるにもかかわらず、よく売れて全米どこに



John D. Lapp 氏のビジネス・カード

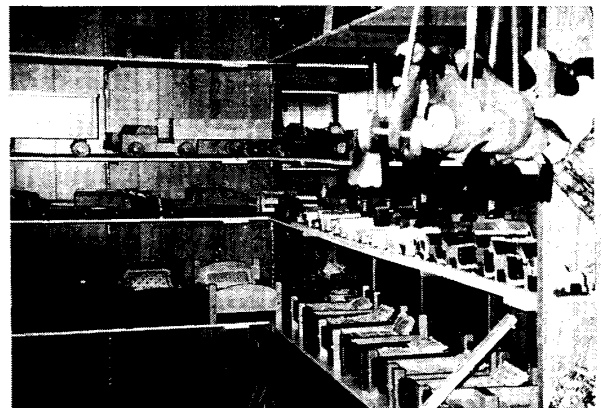


John K. Lapp 氏のビジネス・カード

二人の名刺には電話番号が載っていない。これは、アーミッシュ教会の教会戒律が電話線の家屋への引き入れを禁じているためである。



John D. Lapp 氏製造のロールトップデスク



John K. Lapp 氏の玩具店内

でも輸送されるまでになった。仕事は繁栄し、息子に農業を任せてラップ氏は家具製造販売の事業に専念している。また息子の一人を家具製造の後継者として育てている¹⁶⁾。John K. Lapp氏は1949年に生まれた。多産系の家族で14兄弟の次男として、早くから独立する必要があったため、大工の職業を選んだが、足の負傷を転機として20代で玩具製造販売を専業で一人で始め、現在2名の従業員を雇って順調に事業を展開している。アーミッシュとしては晩婚で35才で子供ができ、現在二人の子供がいる¹⁷⁾。どちらの店も作業場と売場が隣接している。作業場ではディーゼルエンジンから動力を得た空力ポンプで作動できる種々の動力工具が所狭しと置いてあり、精巧な木工製品を作るための道具は取り揃えられている。

3. アーミッシュ・ビジネスの成功要因

アーミッシュ運営による小学校で8年間を過ごし、アーミッシュ女性の教師から基本的な読み、書き、計算の訓練しか受けていないにもかかわらず、アーミッシュ経営による事業が近年次々に出現して成功を治めている。アーミッシュ自営業者を輩出している要因はどのようなも

のであろうか。

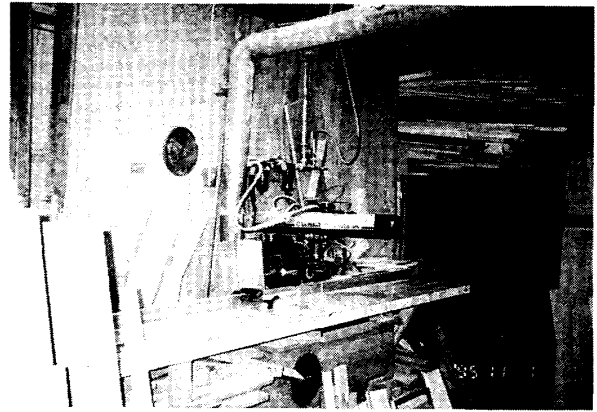
第一に、ランカスター郡の旧派アーミッシュ教会の職業選択における教会戒律の緩和が認められる。ランカスター郡の旧派アーミッシュは北部地区と南部地区に分かれてふたつの大きな連合体を組織しているが、基本的には各教会区の牧師が自分の地区の教会戒律を決めている。教会戒律は牧師からの一方的な宣言ではなく、毎年2回教会員全員の合意を得て、聖餐式の前に確認されるため、教会構成員の実情に応じて徐々に変わってきている。特に教会戒律の変更によるアーミッシュのライフスタイルの変化刷新は、経済的報酬を伴う場合、経済的性格を持たないものよりも教会全体として認知されやすい¹⁸⁾。アーミッシュ内での広範な自営業の広がりはまさしくこの教会戒律の緩和によるアーミッシュライフの規範の変更を示している。ただ、アーミッシュ事業家に対して旧派アーミッシュとしてアイデンティティの喪失に通じるような劇的な変化刷新をアーミッシュ教会は認めていない。自動車の所有、コンピューターの使用、店舗への電力会社からの電力の供給などは外的世界との無限の接触や無尽蔵の情報提供を可能にするため、アーミッシュ事業家としても忌避しなければならない。

第二に、教会戒律の緩和と密接な関係があるが、70年代から80年代にかけてのアーミッシュ・テクノロジーの進歩がある¹⁹⁾。旧派アーミッシュは教会戒律により電気の供給を電力会社から受けることができない。しかし、例えば製造業等の自営業を展開したければ、なんらかの動力源なしに事業を起こすことはできない。このため、アーミッシュは革新的代替動力システムを考案した。まず、12ボルト直流バッテリーをスターターとするディーゼルエンジンを備え付け、そのシャフトからの動力によりエアーコンプレッサーを回し高圧空気をタンクに貯める。仕事場に貯蓄タンクからパイプを引く。仕事に必要な動力器具や機器のモーターを空力用に改造し高圧空力によって動かす。これにより、旋盤、メタルプレス、溶接機、ドリルなど製造業に必要な基本的な機械類のほとんどをアーミッシュ自営業者は使うことができるようになった。このため、製品の品質において一般の会社と十分に競争できるようになった。さらに、プロパンガスの使用も認められるようになったため、火力の使用が飛躍的に容易になった。さらに、12ボルトのバッテリーから変換器を通して110ボルトの交流を発生させてこれを動力源としてキャッシュレジスターを使用するアーミッシュ経営の店舗が増えている²⁰⁾。すなわち、110ボルトの電線の家屋への引き入れは教会戒律によって禁止されているが、それを補う代替システムの考案により、アーミッシュ事業の展開は著しく活性化され、競争力を持つことになった。

第三に、アーミッシュ人口の飛躍的増加のためアーミッシュのニーズに対応するための店舗が必要となった。例えば、アーミッシュ用の馬車はアーミッシュ経営の店舗が作っている。上述の空力用に改造された工具や機械類もアーミッシュ製造業者が供給している。アーミッシュの家庭に普及している絞り式洗濯機もアーミッシュ業者が製造してアーミッシュ小売店が販売している²¹⁾。同一的価値観を共有するアーミッシュの生活形態をもっともよく理解する者は、もちろんアーミッシュであるため、アーミッシュ相互間での物品購入の頻度は高い。すなわち、過去約20年間にアーミッシュ社会のなかで様々な自営業が生まれたため、共同体内部で、多



家屋内に備え付けられたディーゼルエンジン、
エアータンク



空力用に改造された木工用機械



アーミッシュ経営のキルト店の机にあるカシオの
最新式キャッシュレジスター

くの品物を供給できる相互依存的経済インフラストラクチャーが形成されてきた。

第四に、アーミッシュ的規範に従えば、事業規模を極端に拡大できないため、小規模な自営業者が大半を占めている。「大きい」、「目立つ」、「派手である」など自己主張、自己のプライドに通じる概念はアーミッシュの基本的態度の根本となる神への「従順」と真っ向から相反する。そのため規模の拡大を目指さないという営業方針が逆説的ではあるがアーミッシュ事業による

製品なり、サービスを絞りこませ、質の向上をめざして、利益をあげているように思われる。経費面においても家族経営が大半を占める小規模店舗では人件費は高くないし、派手な広告が行なわないため、経常支出自体が低い。貯蔵用納屋の製造販売会社社長のアーミッシュは6名のアーミッシュ従業員と2名の非アーミッシュの運転手を雇っているが、「6名の従業員以上雇わない。これで十分だ。十分生計を立てている。貪欲になっては駄目だ。この夏は5件のディーラーからの注文を断った。去年の夏は6件断った。……金がありすぎるのは良くない。……繁栄しすぎるのは良くない」と語っている²²⁾。この適性規模を守ろうとする態度こそが事業の不振や失敗を防いでいるのではないだろうか。

第五に、アーミッシュ経営の事業においては、雇用主と従業員は基本的に同じアーミッシュ・コミュニティに属していることが多い。従ってアーミッシュ共同体における種々の行事にも両者とも柔軟に対応できるだけでなく、文化的規範を共有しているため、緊密で、相互信頼の強い家族経営的事業運営をすることができる。さらに、労使双方が旧派アーミッシュである場合、雇用者、従業員とも社会保障税の免除が連邦政府によって認められているため、労使とも余分な税金の支出を押さえることができる²³⁾。またアーミッシュ雇用者はアーミッシュ従業員に対して有給休暇、年金プログラム、健康保険などを提供しない。有給休暇の概念そのものが

アーミッシュにとっては受け入れがたい。労働に対する対価の形での給料をもらうことには彼らは何ら疑問を感じない。しかし、休暇を取るにもかかわらず、給料を受け取ることに彼らは違和感を持つ。年金は高齢後にたいする生活保障であるが、アーミッシュ社会では引退した年長者こそ尊敬を集める存在であり、家族や親類縁者、ひいてはアーミッシュ・コミュニティ全体で面倒を見るのが通例であり、年金制度を取り入れる必要性を認めていない。健康保険は個人の病気にたいする保障であるが、アーミッシュ共同体がさまざまな相互扶助プログラムを持っており、財政的に苦しい病人のいる家族を助ける。すなわちアーミッシュ・コミュニティそのものに緊密な相互福祉、相互扶助の精神が行き渡っているために、アーミッシュ自営業者はアーミッシュ従業員に対する余分な経費の軽減を計ることができ、ひいては事業そのものにたいする投資額を増やし、競争力をつけることができる。

第六に、アーミッシュ製造の品物が一般にその品質と価値において高い評価を受けてきたため、アーミッシュ製品は優秀であるというイメージが世間一般に定着している。ランカスター郡を訪れた旅行者にたいして行なわれた1993年のアーミッシュに対するイメージ調査をまとめた報告書は「大多数の旅行者はアーミッシュ製品が高品質であり、特異な人々によって作られているため、買う価値があると信じている。またかれらはこれらの製品が工場などでなく、ひとりのアーミッシュによる手作りであると思っている」と述べている²⁴⁾。アーミッシュ事業家のなかには抜け目なくこのイメージを市場において活用している者もいる。例えば、あるアーミッシュ経営のキルト店の宣伝パンフレットには、「田園地帯へようこそ。アーミッシュ農場の煙草用の納屋を改造したアーミッシュ家族が経営するキルトとクラフトの店です」とアーミッシュであることをことさらに強調している²⁵⁾。いずれにせよ、アーミッシュの品物は高品質であるというイメージはアーミッシュ事業家が市場に進出する際の強力な武器となっている。

以上のような様々な成功要因を含有して、アーミッシュ・ビジネスが70年代、80年代に花開いた。アーミッシュ自営業全体の約14パーセントが年間売り上げ50万ドル以上のアーミッシュ・ビジネスであり、全体の45パーセントのアーミッシュ・ビジネスは年間売り上げが5万ドルから50万ドルあると言われている²⁶⁾。

4. アーミッシュ・ビジネスの問題点

ランカスター郡ではアーミッシュ経営の事業や店舗が著しく増加し、1990年代にはアーミッシュ農業従事者が全体のアーミッシュ人口の約5割にまで減少した。ペンシルベニア州に移住した18世紀初等から1960年代始めまで、農業技術の変化刷新には直面しても、アーミッシュは農業を生活の糧として営み、均質的な宗教共同体を形成してきた。額に汗して土壌を耕し、自然の恵みを収穫して濃密な同志的かつ相互扶助的共同体のなかで自律的に生活できる農業こそ最適な職業とみなしてきた。しかし、アーミッシュ人口の急激な増加と農地価格の高騰により、今日では約5割のアーミッシュ人口が農業以外の職業に就いているわけであるが、過去約

20年間に急激に起こったこの職業形態の変化はアーミッシュ・コミュニティやアーミッシュ的価値観にどのような影響を及ぼしているであろうか。

農業を中心とする村社会的アーミッシュ共同体は外部社会からの影響を当然受けてはいたが、比較的自立した自己完結的なコミュニティを形成していた。ところが、コミュニティ内にアーミッシュ経営の店舗が次々と開店していけば、観光客を含めて外的世界との接触は大きくなる。さらに店舗が大きくなれば、物品の購入や受け渡しを通して外部市場との接触が頻繁になり、利益を上げるためにはビジネスにおける交渉などで市場の論理を踏まえなければならない。ここに矛盾はないのであろうか。アーミッシュの日常の生活を営む上での基本的態度は神の意志に対する「服従」、「従順」等といえるが、この概念は両親、年配者、共同体、教会に対する「従順」にも当てはまる²⁷⁾。自己主張、プライド、自己達成等の資本主義の発達に不可避であった個人主義的特徴こそアーミッシュが忌避しなければならない概念である。アーミッシュ事業の展開において、このような外的世界の概念と無縁でビジネスを継続することは困難であるように思われる。例えば、店舗の存在をはっきり示すために看板を立てたり、仕事のための名刺を作成したりすることがアーミッシュ事業家の間では一般的であるが、これらの行為はまさに自己を目立たせるための自己主張といえる。「この世的な」世界へ墮落することを恐れて「つり合わないくびき」との接触を避けてきたアーミッシュ的倫理体系と資本主義的合理主義に基づく市場原理との間の矛盾を抱えてアーミッシュ自営業者は事業を展開している。彼らはこの矛盾をどのように乗り越えていくのであろうか。

職業形態の変化はアーミッシュの家族にたいして悪影響を与えているように思える。アーミッシュ事業家は店舗の規模を小さく保って、家族経営的な事業を展開することにより家族の結束を守ろうとしている。なるほど、遠くの会社に朝早くに通勤し夕方なり夜に帰宅するビジネスマンと違い、家族間の接触はもっと多いであろう。しかし農業では、家族が一丸となり朝から夕方まで農場や納屋等で親子共同による作業を通じて、子供はアーミッシュ的価値観と仕事と余暇が渾然一体となるアーミッシュ的ライフスタイルに馴染んでゆく。父親が農業を放棄し、他の職業に就いている場合、アーミッシュ文化の子供への継承がうまく行なわれるのであろうか。特に、父親が従業員として外へ働きに出る時、家族との交わりは平日の夜や週末に限られてくる。アーミッシュ文化の一つの特徴は仕事と余暇の融合などに見られるホーリスティックなライフスタイルであるが、非農業的職業に従事し、仕事と余暇が分かれるために起こる時間の分断化は家族内の結束を弱める方向に働く可能性がある。

ランカスター郡のアーミッシュは農業主体のコミュニティを形成していた時期は社会階層的には比較的均質であったといえる。ところがアーミッシュ・ビジネスが繁栄することにより、アーミッシュ社会のなかに富の蓄積による階層格差が現われてきた²⁸⁾。アーミッシュ・ビジネスの展開において事業家と従業員という労使関係が生まれてきた。事業家の中でも裕福な層から零細事業者まで様々な富の細分化が現われているが、大きく分けて事業家、労働者、農民の3つの階層がアーミッシュ共同体のなかに混在するようになった。この社会階層の分化によってアーミッシュ共同体はどのような影響を受けるであろうか。アーミッシュ事業家は財政面で

最も恵まれているために労働者や農民よりも豊かなライフスタイルを楽しむことが可能である。また、ビジネスを通して外的世界との接触が最も多く、一般のアメリカ人の価値観や考え方にも触れる機会が多い。このような状況の下で、彼らは質素でゆっくりした伝統的アーミッシュの生活を継続することができるであろうか。また、アーミッシュ教会の戒律を農民や労働者とともに同一基準で守っていくことができるであろうか。アーミッシュ労働者の多くはアーミッシュ事業家の下で働き僅かな給料を受け取るため、当然経営者のように財政的余裕はない。自由になる時間も限定されている。アーミッシュの同胞が事業を成功させている姿を目の前で見ている、独立する資金もないとき、彼らは羨望や嫉妬心を雇用者に対して抱かないのであろうか。アーミッシュ農家は財政的には比較的安定しているが彼らの資産は土地にあり、基本的に質素な生活を守っている。アーミッシュ共同体の中では人口の割合が減少を続けているが、アーミッシュ農民のライフスタイルが伝統的にアーミッシュの規範となってきた。新たに勢力を伸ばしているアーミッシュ事業家グループがいつまでアーミッシュ農民と同じ価値観やライフスタイルを共有できるのであろうか。アーミッシュ自営業が急激に増加し職業選択の幅が増したことにより、階層格差が現われてきたアーミッシュ・コミュニティが団結を維持していけるかどうか今後の展開を見守る必要がある。

お わ り に

ランカスター郡の旧派アーミッシュは1970年代から80年代にかけて様々な自営業に進出したが、原則的にアーミッシュ的規範を守りアーミッシュ共同体のなかに留まっている。しかし、アーミッシュ共同体が農業を基盤としていた頃から変質してきている事実は紛れもない。アーミッシュの象徴である馬車、服装、言語、ランプは同じでも、職業の多様化につれて、アーミッシュの生活の変化刷新も加速化している。アーミッシュ共同体内の階層化も著しい。

このような状況の下で、1990年代に入り、旧派アーミッシュはふたつの新しい動向を見せ始めた。ひとつの動きはランカスター郡からの農地を求めて他の州への集団移住である。1978年以降ランカスター郡からの集団移住はなく、農業を放棄し自営業を展開することでアーミッシュ・コミュニティに留まる方針を多くのアーミッシュが取ってきた。しかし、ついに伝統への回帰を求めるランカスター郡の一部のアーミッシュはこの土地を去り、1989年にはケンタッキー州クリントン郡、1991年にはインディアナ州パーク郡、1995年にはインディアナ州ウエイン郡へと農地を求めて移住した²⁹⁾。一方、アーミッシュ・ビジネスの連携をさらに強化しようという動きも見られる。1993年に設立されたアーミッシュ経営のカタログ会社はアーミッシュ・ビジネス用の宣伝を掲載するカタログを作成し、アーミッシュ製品の販売をより広い地域へ広げようとしている³⁰⁾。1994年に設立されたオールド・カントリー・コネクション会社はランカスター郡のアーミッシュ自営業者の様々な製品を集めて、一般大衆や関心を持っている会社に対してオークションを開催するために設立された。通信販売のためのカタログも準備して、アーミッシュ製品を広範囲の顧客に販売しようとしている。第一回目のオークション

には参加の呼び掛けを受けた 200 名のアーミッシュ自営業者のうち 56 名が参加した³¹⁾。

最近のふたつのアーミッシュの動きはまったく相反する方向を目指している。一群のアーミッシュは農業という伝統的職業へ回帰するために敢えて、住み慣れた土地を離れた。一方、アーミッシュ事業家の一部はアーミッシュ・ビジネスの業界をさらに強固かつ密接なものにするためカタログやオークションという形を取り、アーミッシュ・ビジネスの結集を計っている。この相反するふたつの動きがさらに大きな流れとなり、ランカスター郡のアーミッシュ社会が二分化していくのか、それともなんらかの妥協策が生まれるのか予断を許さない。

謝辞

本論文の研究は、1995 年度帝塚山学園特別研究費の助成を受けて行なわれた。ここに記して深謝を表したい。

注

- 1) アーミッシュ研究の先駆者、コールモーゲンは農業こそがアーミッシュの宗教共同体を支える根幹であると看破している。Walter M. Kollmorgen, *Culture of a Contemporary Community: The Old Order Amish of Lancaster County, Pennsylvania* (Rural Life Studies no.4 Washington D.C.: U.S. Department of Agriculture, 1942), p.4.
- 2) アーミッシュは一般的呼称であり、現実には様々な分派が存在する。その中で、変化刷新にたいして、保守的傾向の強いグループを旧派アーミッシュと呼ぶ。本稿でアーミッシュと言及したときは旧派アーミッシュを意味する。
- 3) 各情報源によって、教会区の数と人口には若干の相違があるが、概数はほぼ同じである。ここでは、John A. Hostetler, *Amish Society* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1993), p.97.と Ed Klimuska, "The Amish are changing," *Lancaster New Era*, July 21, 1993. の資料を参考にした。
- 4) 1970 年代の地元新聞は土地価格高騰によるアーミッシュの集団移住の可能性を再三指摘している。例えば、Dick Foster, "Can the Amish Hold on as Farm Prices Soar?" *Lancaster New Era*, July 9, 1973. Dave Hennigan, "Soaring Cost of Farmland: How Can Those Amishmen Pay for \$500,000 Farm?" *Lancaster Sunday News*, January 1, 1978.
- 5) 例えば、Eugene P. Ericksen, Julia A. Ericksen, and John A. Hostetler, "The Cultivation of the Soil as a Moral Directive: Population Growth, Family Ties, and the Maintenance of Community Among the Old Order Amish," *Rural Sociology*, vol. 45 (Spring, 1980), p.66.
- 6) Donald B. Kraybill, "Constructing Social Fences: Differentiation Among Lancaster's Old Order Amish," Paper presented at the 89th Annual Meeting of the American Anthropological Association, New Orleans, La., 1990, p.2.
- 7) *Amish Directory of the Lancaster County Family* (Gordonville, Pa.: Pequea Publishers, 1973).
- 8) *Amish Directory of the Lancaster County Family* (Gordonville, Pa.: Pequea Publishers, 1988).
- 9) *Amish Directory*, 1973, 1988.
- 10) Donald B. Kraybill and Steven M. Nolt, "The Rise of Microenterprises," in Donald B. Kraybill and Marc A. Olshan, ed., *The Amish Struggle with Modernity* (Hanover, Nh.: University Press of New England, 1994), pp.151-152.
- 11) Ed Klimuska, "How the Amish are changing: Scores of farmers are starting non-farm businesses that are amazingly successful," *Lancaster New Era*, June 24, 1994.
- 12) *Ibid.*
- 13) Donald B. Kraybill, *The Riddle of Amish Culture* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1989),

p.201.

- 14) Mary J. Lane, "An Amishman Turns Entrepreneur," *Lancaster Sunday News*, May 3, 1981. *The Lancaster County Family Register* (Gordonville Pa. : Pequea Publishers, 1988), p.27.
- 15) Douglas J. Wenrich, "Amish Businesses: More Farmers Turn Away from Soil and Toward Carpenter Shop," *Lancaster Sunday News*, April 1, 1984.
- 16) *The Lancaster County Family Register*, 1988, p.82. 及び筆者との直接の面談による。
- 17) *The Lancaster County Family Register*, 1988, p.83. 及び筆者との直接の面談による。ラップ氏は最初から農業を職業とする意向はまったくなかったと語った。
- 18) John A. Hostetler, *Amish Society*, p.363.
- 19) アーミッシュにおけるテクノロジーの限定的使用の実態の詳しい説明は, Stephen Scott and Kenneth Pellman, *Living Without Electricity* (Intercourse, Pa. : Good Books, 1990). ランカスター郡の1980年代のアーミッシュ・コミュニティにおける代替動力源の普及については, Ernest Schreiber, "Amish tech: Without electricity, ingenious Amish find other ways to power home, farm machines," *Lancaster New Era*, March 13, 1989.
- 20) Donald B. Kraybill, *The Riddle of Amish Culture*, pp.162-163.
- 21) *Old Order Shop and Service Directory: United States and Canada* (Gordonville, Pa. : Pequea Publishers, 1990) に掲載されている宣伝をみると, 旧派アーミッシュがいかに多くの職種の分野に進出しているかがよく分かる。
- 22) Penny Armstrong, Gideon Fisher, Ed Klimuska, and Gerald Lestz, *Amish Perspectives*, (York, Pa. : York Graphic Services Inc., 1988), pp.50-51.
- 23) アーミッシュの福祉についての考え方, 及びアメリカ社会保障制度との対立, 社会保障制度からの免除に関する詳しい説明は, 拙稿, 「旧派アーミッシュにおける福祉の概念——アメリカ社会保障制度との対立を例として——」『帝塚山短期大学紀要』第31号(1994), pp.124-134を参照。
- 24) Ed Klimuska, "Tourists who buy farm-made goods have an idyllic view of Amish life," *Lancaster New Era*, June 24, 1994.
- 25) *Ibid.*
- 26) Kraybill and Nolts, *op. cit.*, p.159.
- 27) この概念はアーミッシュの日常生活の規範となり, Gellassenheit という言葉で表される。Gellassenheit についての詳しい概念的説明及びアーミッシュの生活全体への影響については, Sandra Cronk, "Gellassenheit: The Rites of the Redemptive Process in Old Order Amish and Old Order Mennonite Communities," *Mennonite Quarterly Review*, 55 (January, 1981), pp.5-44.
- 28) Ed Klimuska, "Are Amish dividing into farm, business classes?" *Lancaster New Era*, July 19, 1993.
- 29) Ed Klimuska, "As growth crowds in and land prices climb, some local Amish are leaving Pennsylvania," *Lancaster New Era*, April 26, 1995.
- 30) Ed Klimuska, "New publication forum for Amish non-ag businesses," *Lancaster New Era*, June 28, 1995.
- 31) Daniel Guido, "Auction: Mainly in the Plain," *Lancaster Sunday News*, April 2, 1995.